

雅楽をテーマとした小・中学校音楽科授業の開発

伊藤 真

(本学大学院教育学研究科)

杉原 歩

(本講座大学院博士課程前期在学)

井内 志穂

(本講座大学院博士課程前期在学)

岡田 みなみ

(本講座大学院博士課程前期在学)

山本 千尋

(本講座大学院博士課程前期在学)

済川 貴

(本講座大学院博士課程前期在学)

堀江 遥

(本講座大学院博士課程前期在学)

栗木 陽子

(本講座大学院博士課程前期在学)

勝部 遥子

(本講座大学院博士課程前期在学)

Development of Music Classes on *Gagaku* in Elementary and Junior High School

Shin ITO Takashi SUMIKAWA

Ayumi SUGIHARA Haruka HORIE

Shiho INOUCHI Yoko AWAKI

Minami OKADA Yoko KATSUBE

Chihiro YAMAMOTO

Abstract

The purpose of this study is to develop music classes using *Etenraku*, which is one of the oldest existing music in Japan called *Gagaku* (traditional Japanese court music), as a material in elementary and junior high school. The main points of view on developing music classes are as follows: (1) to pursue the musical substance, (2) to center a proactive and action-oriented learning of students, and (3) to promote and enhance language activity.

The music class in elementary school has two goals. One is that students develop an understanding for a mechanism of producing sounds with double reed through the activity to make hand-made musical instrument. The other is that students understand the role of *hichiriki* (a kind of flute) in *Gagaku* ensemble, discovering sound aspects of *hichiriki*, and expressing the sound aspects with their own words.

The music class in junior high school has two goals. One is that students understand the musical style of *Gagaku* through creating rhythm patterns of percussion section for the melody of *Etenraku*. When creating, students write musical note using composition software. The other is that students engage in entire learning process with language activity, for example, talking together about what they want to express in their work, describing their intention put into their work, or expressing what they feel when they listen other's work.

はじめに

平成 20 年度に改訂された学習指導要領では、音楽の目標として新たに音楽文化についての理解を深め

ることが示された。国際化が進む中で我が国や郷土の伝統音楽に対する理解を深めることが重視され、その学習効果を高めるために、学習領域間の関連を図りながら、実際に和楽器に触れるなどの体験的活動を行うことが明記されている。また、学習指導要領改訂に伴って新たに用いられる音楽科教科書でも和楽器や我が国の伝統音楽に関する記述が充実しており、その重要性が理解できる。

学習指導要領において長い間教材として扱われている我が国の伝統音楽として、以下の3曲を挙げることができる。まず、八橋検校作曲の「六段（の調）」である。昭和26年の小学校の試案において鑑賞用音楽レコードの中に含まれたのを最初に、昭和33年（鑑賞領域の教材）、昭和43年（鑑賞共通教材）、その後は中学校での扱いに変わり、昭和52年、平成元年（いずれも鑑賞共通教材）において継続して扱われている。次に、宮城道雄作曲の「春の海」である。これも昭和26年の小学校の試案において鑑賞用音楽レコードの中に含まれたのを最初に、中学校の昭和33年（鑑賞領域の教材）、昭和44年は他の理由から欠落するが¹⁾、その後再び小学校での扱いに変わり、昭和52年、平成元年（いずれも鑑賞共通教材）において継続的に扱われている。もうひとつは、雅楽「越天楽」である。これは昭和26年の試案から昭和33年、昭和44年、昭和52年、平成元年まで一貫して中学校（鑑賞領域の教材、もしくは鑑賞共通教材）において扱われている。ちなみに小学校では、慈鎮和尚作歌「越天楽今様」が昭和52年、平成元年、平成10年、平成20年にわたり継続して歌唱共通教材に設定されている。これらの中から本研究では、現存する我が国最古の音楽である雅楽に着目し、「越天楽」を用いた小学校および中学校における授業の開発を行い、その内容について提案する。

授業開発の視点として、「越天楽」を用いながら雅楽の音楽的内容を追求することに加えて、児童・生徒の主体的な活動を中心とすること、および言語活動の充実を図る工夫をすることを設定した。その背景には、平成20年度に改訂された学習指導要領において、主体的な学習に取り組む態度を養い、個性を生かす教育の充実に努める必要性が示されているとともに、生徒の発達段階を考慮して言語活動の充実が重視されていることが挙げられる。

1. マインドマップを利用したテーマの整理と抽出

雅楽を大テーマとして、さらに具体的な授業のテーマを決定するにあたり、ブザン（Tony Buzan）が提唱しているマインドマップ（Mind Map）を援用した。マインドマップとは、中心的概念となるキーワードを中央に置き、そこから連想的に放射状にキーワードやイメージを広げる思考の整理法である²⁾。

ここでは図1に示すように、中心概念である「雅楽」から「楽器」「楽曲」「演奏形態」「音楽的要素」「地域性」「日本の伝統音楽」のブランチを展開し、さらに連想されるキーワードを導いている。これらを総合すると、雅楽をテーマにした場合の重要な要素として以下の4点が浮かび上がる。すなわち、①音楽的内容、②文化的/content、③歴史的内容、④地域性、である。①音楽的内容には、拍子や間、調、音程、強弱などの音楽的要素、楽器、楽譜、奏法、演奏形態、楽曲のテーマなどが含まれる。②文化的/contentには、雅楽演奏の際の服装、色彩などが含まれる。③歴史的内容には、雅楽の歴史、演奏される場、楽曲の伝承、演奏者の変遷などが含まれる。④地域性には、西洋音楽との相違点（西洋音楽の視点から見た雅楽の特異性）、アジア地域の音楽との比較などが含まれる。

このように雅楽を中心とした放射思考を整理した上で、小学校および中学校の児童・生徒の観点から、雅楽をどのように授業対象とすればよいか検討を行った。まず小学校では、学習内容を児童の経験や日常生活と関連づけ、授業の対象に興味関心をもたせることが重要である。その中で、音楽の授業で親しんでいるリコーダーと雅楽で用いられる管楽器の関連性に着目し、雅楽の楽器の中から箏をテーマとして設定することとした。楽器の外観、音色、発音の仕組み、奏法など、児童が普段接している楽器とは異なる点が多いため、興味をもたせやすい領域といえる。

一方、中学校では、雅楽を含む日本音楽をテーマとした授業はその多くが鑑賞活動にとどまり、授業自体が非常に退屈であることが多く見受けられる。それは、生徒は雅楽や日本音楽そのものにあまり慣れ親しんでおらず、日常生活とかけ離れた存在であることに起因していると思われる。したがって、生徒が実際に体験するような能動的・積極的な行動を引き出すような授業を構成する必要がある。しかしながら、能動的・積極的な行動を引き出すような授業を構成する際に、これまでとはとりわけ鑑賞活動と楽器の演奏体験を関わらせた授業形態が多く、ある種一面的な授業になりがちであった。そこで、近年注目されつつ

あるコンピュータを用いた創作活動を通して、新たな雅楽の学習の可能性を見出すことを試みることにした。

このように、小学校の授業開発においては箏楽を中心に雅楽で用いられる楽器に着目し、中学校の授業開発においてはコンピュータを用いた創作活動に着目した。

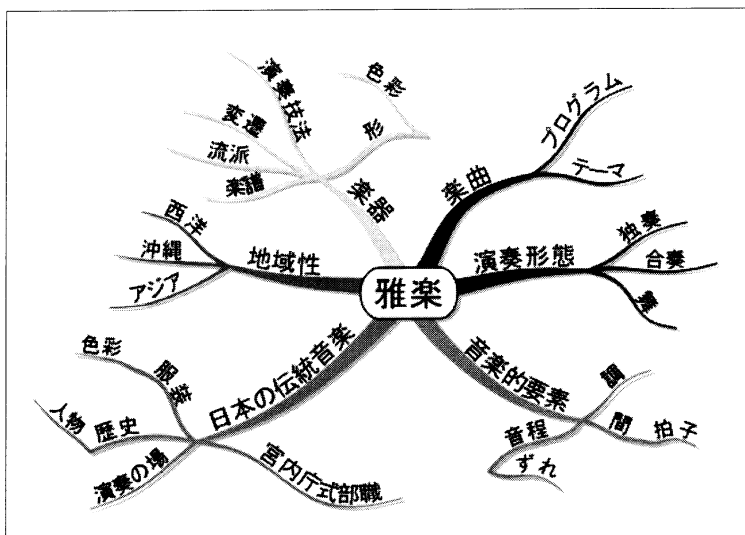


図1 雅楽を中心概念としたマインドマップ

2. これまで行われてきた授業実践の検討

(1) 児童・生徒の体験活動や言語活動をとり入れた授業実践例

茂手木・秦野 (2005) は、チンドンを題材とした授業実践を行っている³⁾。チンドンをとり上げたのは、チンドンが児童にとって比較的親しみやすいものであると同時に、歌舞伎や能にみられるような日本音楽に特徴的なアンサンブルの形態をとっていることから、日本音楽の導入に適しているためである。チンドンの鑑賞、創作、グループによる練習、発表などのいずれの学習場面においても、自分の言葉で表現し、発表する行為が要求されている。

福永 (2007) は、ベトナム伝統楽器トゥルンを用いた鑑賞と体験学習の授業実践を行っている⁴⁾。楽器確保や教授の際の知識不足などの課題はあるが、体験学習をとり入れることによって生徒の興味や視覚的理解を促し、音楽に対するより深い理解が得られた。

高橋 (2009) は、雅楽「越天楽」にみられる音楽の構成要素を指導する鑑賞の授業実践を行っている⁵⁾。「諸来と片来⁶⁾」「箏楽と龍笛の音色」「ヘテロフォニー」の3つの構成要素に気づかせることによって楽曲の豊かな享受を可能としている。また、音色を聴いて感じ取ったことを言語化する活動から、雅楽の構成要素の知覚・感受が達成できたことを裏づけている。

(2) 創作活動の授業実践例

齊藤 (2008) は、学習したリズムの組み合わせによる和太鼓を用いた創作の授業実践を行っている⁷⁾。創作の際には、形式やリズムの組み合わせに関する条件を与え、強弱、速度、音色を工夫することでイメージに合った表現を目指している。

石井 (2002) は、日本の伝統音楽に親しみをもたせるために、身近な楽器やコンピュータを用いてオリジナルの雅楽を創作させる授業実践を行っている⁸⁾。児童が作った歌詞に雅楽の音楽を用いてふしをつけることを創作課題としている。コンピュータを用いた学習成果として、自分の作ったふしをコンピュータが演奏してくれるため、楽器演奏が苦手な児童への手立てとなったこと、ふしに合う楽器を自由に選んで試すことができるため、楽器に対して新たな興味関心を喚起できたこと、伴奏づけや合奏など自分なり

の作曲を楽しむことができたことなどを挙げている。

大西（2011）は、情報科の授業においてコンピュータを用いた作曲の授業実践を行っている⁹⁾。すべての生徒が自分なりの作品を創作できたものの、課題の要求が高く、生徒の実態にそぐわない実践であったことを報告している。

石井や大西の実践が示すように、創作活動にコンピュータを用いることのメリットは、創作や作曲に関する高度な知識と技術がなくても容易に創作を行うことを可能にすることである。また、楽器演奏が得意ではない児童・生徒でもコンピュータに楽譜を入力することによってコンピュータに演奏させることができる。総じて児童・生徒の活動内容に対する関心は高い。しかし、ゼロから旋律を創作する一連の創作過程は児童・生徒にとってハードルが高く、課題として浮かび上がっている。

3. 筆箏の構造と役割に着目した小学校音楽科授業

(1) 本授業の位置づけ

本授業は全2時間で構成される。第1次の学習では、実際に楽器を作る活動を通して、ダブルリードの音の出る仕組みについて理解させることを目標とする。音の出る仕組みを知ることは、その楽器に対する理解をより深めることにつながる。楽器から音が出る原理は単純なものであるが、演奏している際には楽器のどの部分かどのように振動しているかは目に見えず、意識することが難しく、児童が自分の力で発音の原理を解明することは容易ではない。したがって、本授業では児童がストロー笛を制作し、実際に音を出す体験を通して、ダブルリードが振動し、空気圧が変化することによって音が出るという物理的な原理を学習する。この学習は楽器に対する多面的な理解を促すものであり、音楽の授業において大きな意義を有する。この体験学習の後にダブルリードの楽器の例としてオーボエとファゴットをとり上げるが、先のストロー笛の体験によってダブルリードの楽器の音色や楽曲に関して児童の興味を喚起しやすい。このようにして、第2次で扱う、我が国の伝統的なダブルリードの楽器である筆箏への橋渡しを行い、筆箏に対して親しみをもちやすくする工夫をした。

第2次の学習では、筆箏の音色の特徴について考え、自分なりに言語化することによって、雅楽における筆箏の役割を理解させることを目標とする。音楽の聴取は、聴取者の主観と密接に関わっており、同じ楽曲を聴いてもその受け取り方は人によって様々である。しかし、筆箏の音色の特徴について自分なりに言語化したものをクラスの皆で共有することによって、自分とは異なる意見に出会うことができ、それぞれの音楽に対する視野が広がるという教育的効果が期待できる。また、楽器は音楽の構成要素の1つであり、特定の楽器の音色に着目して聴き取る活動は、楽曲を構成している様々な要素を知ることにつながる。その楽器の様々な特徴やそこから導き出されるよさについて、合奏というフィルターを通して理解を深めることにもなる。このように、楽器の音色を意識して聴くという力は、音楽の授業において今後も継続的に育成すべき重要な鑑賞の能力であるといえる。

(2) 授業概要

題 材 名 筆箏に親しもう

教 材 雅楽「越天楽」ほか

対 象 小学校第6学年

題材目標

- 楽器の発音原理に興味をもち、実際にストロー笛を制作する活動を通して、ダブルリードの音の出る仕組みを理解する。
- 筆箏が用いられている楽曲を聴き、その音色の特徴について考え、自分の言葉で表現し、筆箏のよさや音色の特徴、雅楽における筆箏の役割を理解する。

指導計画（全2時間）

第1次（1時間）：ダブルリードの音の出る仕組みを理解する

第2次（1時間）：筆箏の音色の特徴を感じ取る

<第1次>

○科学的思考に基づいて、ダブルリードの音の出る仕組みを理解する。

学習内容	指導の意図と手立て	評価規準 [方法]
[導入] 1. ストロー笛という楽器があることを知る。	○ストロー笛を提示し、本時の学習に興味をもたせる。	
[展開] 2. ストロー笛を制作する。	○ストロー笛の完成図を書いた模造紙を見せながら、ストロー笛の作り方を教授する。1人1本ずつストロー笛を制作させる。	
3. 音を出す。音の出る仕組みを理解する。	○完成したら実際に音を出させ、どうしたら音が出るか工夫させる。ストローが振動して音が出ていることに気づけばその発言をとり上げ、ベルヌーイの定理を説明し、科学的根拠をもった理解をさせる。ベルヌーイの定理の説明は2枚の紙を用いて行う。児童から発言がない場合はどのようにして音が出ているかに注目させる。 ※説明時には音を出さないというルールを作る。	◆積極的にストロー笛の制作に取り組むことができる [行動の観察]
4. 西洋の楽器に注目する。	○ストロー笛と同じ原理で音が出るダブルリードの楽器として、オーボエとファゴットを提示する。よく理解できるようにリードの部分に注目させ、ストロー笛と比較させる。	◆ストローを切る角度やくわえ方などを工夫して、音を出すことができる [行動の観察]
[まとめ] 5. 本時のまとめ、次回の予告を行う。	○本時のまとめとして、ストロー笛がオーボエやファゴットと同じ原理で音が出ていることを確認する。	

<第2次>

○箏の音色の特徴を感じ取り、言葉で表現する。

○雅楽における箏の役割を理解し、説明する。

学習内容	指導の意図と手立て	評価規準 [方法]
[導入] 1. 前時の振り返りを行う。	○ストロー笛、オーボエ、ファゴットの共通点を確認し、音が出る原理の復習を行う。	
2. 箏について学習する。	○第1次の学習をふまえて、ダブルリードを使用する日本の楽器として、箏を提示する。	
[展開] 3. 箏の楽曲を数曲聴く。意見の共有を行う。	○箏の音色の特徴を捉えさせるために、音色を自分の言葉で言語化し、ワークシートに記入させる。記入例を提示する。 ○言語化した音色の特徴を児童に発表させ、意見交流を行わせる。	◆箏の音色の特徴を自分の言葉で表現することができる [ワークシートの記述] [発言の内容]
4. 箏の役割を理解する。	○旋律、リズム、和声のうち、箏が担当しているものが何かに注目させ、「越天楽」の冒頭5分程度を鑑賞させる。 ○箏が雅楽において旋律を担当することを理解させる。	◆箏が旋律の役割を担うことに気づきながら聴いている。 [発言の内容] [ワークシートの内容]
[まとめ] 5. 本時のまとめを行う。	○箏の音はストロー笛、オーボエ、ファゴットと同じ原理で出ていること、また箏が雅楽合奏において旋律の役割を担っていることを確認する。	

(3) 望まれる学習成果と今後の結びつき

本授業は、数ある日本の伝統楽器の中から箏に焦点を絞ったことによって、日本の音楽文化に関する

知識を部分的に深化させることができる。今後は雅楽の他の管楽器に視野を広げ、それらを比較する活動につなげることができる。また、それぞれの楽器の役割にも着目することによって、雅楽を通して音楽の諸要素の学習に発展させることが可能である。そして、雅楽全体の特徴を理解することにつながる。このような活動は、雅楽以外にも、日本の伝統音楽に対するアプローチともなる。

また、本授業では、同じダブルリードの楽器（オーボエやファゴットなど）を紹介する程度にとどまっているが、さらに音色や奏法にまで踏み込んで筆算と比較する活動を行えば、より筆算のよさを理解できると思われる。国や文化を越えて類似する楽器を比較する活動は、それぞれの特徴や文化を理解するだけでなく、日本の音楽文化に対する誇りをもつことへとつながるのではないだろうか。

さらに、ストロー笛の制作やベルヌーイの定理を用いた発音原理の説明を通して、音楽を感覚的にだけでなく科学的・論理的思考で捉えられるようになって考えられる。音楽を科学的・論理的に思考することによって、楽器の共通点や相違点を認識する力、さらに音色を識別し、よさを理解する力を生み出すことが期待される。

4. コンピュータによる創作活動を中心とした中学校音楽科授業

(1) 本授業の位置づけ

本授業は全4時間で構成される。第1次の学習では、雅楽の歴史や音楽の特徴について理解を深める。小学校で学習した「越天楽今様」を歌唱することで小学校における学習との連続性をもたせるとともに、第2次で扱う「越天楽」の旋律に対してイメージを膨らませる。

第2次の学習では、コンピュータを用いて創作活動を行い、生徒自身が旋律をもとにリズムパターンを考え作品を完成させる。その際に、雅楽を創作の素材としてとらえ、既存の雅楽の旋律に打楽器のリズムを創作する。ここでは、雅楽特有の曲想や雰囲気を感じ取るとともに、雅楽の形式を理解することを目標としている。また、記譜を行う際に必要な音楽の諸要素を用いた活動を通して、基礎的な知識の定着を図ることをも意図している。

第2次の学習を構成するグループ活動（第2時）および作品発表（第3時）では、表現したいイメージについてグループで話し合ったり、創作した作品に込めた自分たちの思いを言葉で表現したりすることを通して、また、他者の創作の意図を理解し、鑑賞して感じ取ったことを言葉で表現することを通して、言語活動の充実を図ることを目標としている。

(2) 授業概要

題 材 名 楽譜制作ソフトを使って自分たちの「越天楽」を創ろう

教 材 雅楽「越天楽」、「越天楽今様」

対 象 中学校第1学年

題材目標

- 創作活動を通して伝統音楽に親しむことができる。
- グループ活動の中で自分の意見を相手に伝えることができる。

評価規準

- 意欲的に創作活動に取り組むことができる【音楽への関心・意欲・態度】
- 楽曲をイメージしながら「越天楽」の打楽器パートを創作することができる【音楽表現の創意工夫】
- 正しい音高とリズムで「越天楽今様」を歌うことができる【音楽表現の技能】
- 自分の意図を相手に伝え、他者の意図を感じ取り、鑑賞することができる【鑑賞の能力】

指導計画（全4時間）

第1次（1時間）：雅楽を構成する諸要素の理解、「越天楽今様」の歌唱

第2次（3時間）：個人による自由な「越天楽」打楽器パートの創作（1/3）

グループによるルールに基づいた「越天楽」打楽器パートの創作（2/3）
発表（3/3）

<第1次>

- 雅楽を構成する諸要素について理解する。
- 旋律を正しい音高とリズムで歌う。

学習活動・内容	指導上の留意点	評価規準 [方法]
[導入] 1. 「越天楽」の冒頭部分を鑑賞する。	○「越天楽」を聞いたことがあるか発問する。	
[展開] 2. 雅楽について学習する。 3. 「越天楽今様」を歌唱する。 4. 雅楽で用いられる楽器について学習する。 5. 拍子とリズムについて復習する。	○雅楽の歴史、リズム、楽曲についてワークシートを用いて説明する。 ○小学校で学習したことを思い出させながら、楽曲のイメージを大切に歌唱させる。 ○写真を掲載したワークシートを用いて楽器の説明をする。 ○各楽器の音色を提示する。 ○教科書の巻末資料を適宜用いる。	◆「越天楽今様」の旋律を正しい音高とリズムで歌うことができる [観察]
[まとめ] 6. 本時のまとめをする。		

<第2次 第1時>

- 雅楽を素材として、楽曲の雰囲気を活かした独創的な作品を創作する。

学習活動・内容	指導上の留意点	評価規準 [方法]
[導入] 1. 「越天楽」の竜笛と箏のパートを聴く。	○旋律を常にイメージさせながら鑑賞を行う。	
[展開] 2. 個人で「越天楽」の打楽器パートを創作する。 3. 創作した「越天楽」を隣同士で聴き合い、感想を言い合う。	○あらかじめ楽譜制作ソフト (Finale) を起動させる (説明が終わるまで操作ができないようにしておく)。 ○個人創作についての自己評価を行うことを伝えておく。 ○独創性を重視し、自由に創作するよう指示する。 ○使用する音高や和音に制限を設けない。 ○机間指導を行い、適宜創作の支援を行う。	◆意欲的に創作に取り組むことができる [行動の観察] ◆楽曲をイメージしながら独創的な作品を創作できる [行動の観察] [作品の内容]
[まとめ] 4. 個人で創作した「越天楽」を発表する。 5. 自己評価表に記入する。	○2人程度の生徒に作品を発表させる。 自己評価項目 ①旋律をイメージして創作することができたか ②個性を作品に表現できたか ③隣同士で聴き合い、感想を相手に伝えることができたか	

<第2次 第2時>

- イメージを表現できるように、グループで協力して創作活動を行う。
- 打楽器のリズムの規則性を理解し、創作活動に応用できる。

学習活動・内容	指導上の留意点	評価規準 [方法]
[導入] 1. 「越天楽」の楽譜（教科書）を見る。	○楽譜を提示し、打楽器のリズムパターンに着目するよう指示する。 ○生徒の気づきに基づいて、打楽器のリズムパターンに規則性があることを説明する。	◆打楽器リズムの規則性を理解することができる [行動の観察] [発言の内容]
[展開] 2. 決められたルールに従ってグループごとに「越天楽」の打楽器パートの創作をする。	○以下のルールを説明する ①楽器ごとに異なるリズムパターンを作る ②2小節または4小節単位のリズムパターンを繰り返す ③楽器ごとに規則性をもつ小節数が異なってもよい（2小節単位の楽器と4小節単位の楽器を組み合わせてもよい） ④リズム譜（一線譜）上に音符を入力する ⑤創作の意図を明確に表すようなサブタイトルを考える ○次の時間に発表を行うことを伝え、発表用シートにサブタイトルおよび創作の意図を詳しく記入することを指示する。 ○本時の最後に自己評価を行うことを伝える。 ○机間指導を行い、創作の助言をする。	◆グループで協力して創作活動に取り組むことができる [行動の観察] ◆自分たちのイメージを表現するような作品を創作できる [行動の観察] [作品の内容]
[まとめ] 3. 自己評価表に記入する。	自己評価項目 ①グループで協力して創作活動に取り組むことができたか ②グループ活動の中で自分の意見を相手に伝えることができたか ③グループ活動の中で自分たちのイメージどおりに作品を創作することができたか ④決められたルールに従って作品を創作することができたか	

< 第2次 第3時 >

- 自分たちの創作の意図を適切な言語表現で相手に伝え理解させる。
- 他者の創作の意図を感じ取り、評価することができる。

学習活動・内容	指導上の留意点	評価規準 [方法]
[導入] 1. 発表の準備をする。		
[展開] 2. グループごとに創作した作品を発表する。 (1グループ5分程度)	○グループごとに作品につけたサブタイトルと創作の意図を簡単に説明し、作品をコンピュータで再生させる。 ○聴き手は鑑賞シートに基づき、評価と感想を記入するよう伝える。	◆創作の意図を適切な言語表現で相手に伝えることができる [行動の観察] [発表用シートの記述] ◆創作の意図を感じ取り、評価することができる [鑑賞シートの記述]
[まとめ] 3. 自己評価表に記入する。	自己評価項目 ①聴き手に自分たちの創作の意図を明確に伝えることができたか ②他のグループの発表を静かに聴くことができたか ③他のグループの創作の意図を読み取り、評価することができたか	

(3) 望まれる学習成果と今後の結びつき

本授業は、雅楽「越天楽」の旋律を基に楽譜制作ソフトを用いて、打楽器のリズムパターンの創作を行い、生徒が日ごろ接することの少ない雅楽を自分の手で改変することを通してより身近なものに感じることができると考えられる。コンピュータおよび楽譜制作ソフトを用いることの利点として、楽器を操作する技術的困難から解放され、自由に創作活動ができることが挙げられる。その他、コンピュータを通して記譜の仕組みや音符の学習を自立的に行うことができることも大きな利点である。教師にとってはゆとりをもって机間指導を行うことができ、生徒の習熟度に応じて細やかな指導を行うことも可能である。

また、グループ内で意見を交わしたり、創作の意図をクラス全体に向けて発表したりすることによってコミュニケーション能力の向上を促進することが期待される。

旋律の創作を目的に行われたこれまでの授業実践では、学習課題の難易度が高かったため生徒の実態が合わず、期待する成果が得られていない。何もない状態から新たな旋律を創作するためには、高度な音楽的知識と能力が必要である。これをふまえて本授業では、既存の旋律に対してリズムパターンを創作する活動を行ったが、旋律は音楽の諸要素として重要な位置を占める。したがって、いかに旋律の創作や、旋律と伴奏を合わせた創作を学習課題として設定するかについては多くの課題が残されている。

なお、大学生を対象として本授業を試行した際の作品の一部を以下に掲載する。

越天楽
祝賀舞
～見るからに行く当てのない度れ切った旅の一座～

電笛
箏
鼓
羯鼓
太鼓

The score shows a vocal line in G major with a 4/4 time signature. The percussion parts include a drum (太鼓) with a steady beat, a shō (箏) with a melodic accompaniment, and various other instruments. The lyrics are written below the vocal line.

越天楽
～天狗の踊り～

電笛
箏
鼓
羯鼓
太鼓

This score is similar to the first one, featuring a vocal line and percussion accompaniment. The lyrics are written below the vocal line.

おわりに

本研究では雅楽をテーマに小学校および中学校の授業の開発を行った。普段あまりなじみのないジャンルの音楽を授業対象として、いかに児童・生徒を惹きつけるような魅力ある授業を構成するか試行錯誤を繰り返した。その際に、雅楽に含まれる様々な音楽的内容から何を学習対象とし、それをどのように教材化するか、また、その教材をどのような学習方法を用いて児童・生徒へ提示するかなどについて検討し、これらの点に関して新たな視点から授業を開発しようと試みた。

一般に、音楽が本来の歴史や文化から遠ざかれば遠ざかるほど、その音楽的意味内容の解釈が困難となる¹⁰⁾。雅楽に関しても、本来の文脈の中で演奏をそのまま享受することから、音楽の授業の枠組みの中で教材化されたものを学習対象とすることへと場を移すことによって、雅楽が本来有している音楽的価値や美的要素などの「音楽の意味」が欠落する危険性がある。児童・生徒を含めて我々の多くが我が国の伝統音楽を聴いて、おもしろくないと感じたり、ただの音の羅列(サウンド)としてしか聴き取れないのは、その音楽が生まれた歴史・文化から遠く離れた現代において、その音楽に関する「学習」なしに聴くから

である。また、本稿で提示した中学校の授業では、雅楽を西洋の記譜システムに変換して取り扱うため、記譜できない要素は演奏から抜け落ちてしまう。したがって、遠い歴史や文化の音楽を扱う際にはその音楽を理解するための適切な「学習」が必要となり、その学習を行うことによって初めて能動的な音楽聴取や能動的な音楽学習が成立する。本研究の文脈で換言すれば、雅楽をテーマに授業を開発する際には、音楽を総体的なサウンドとして扱うだけでなく、本来の雅楽の音楽的価値や美的要素を学習する活動も併せて行う必要がある。このような「学習」に関して本研究では、筆楽の構造とアンサンブルにおける筆楽の役割を考察することを通して（小学校）、また、楽曲の構造理解を通して（中学校）迫ることができたのではないだろうか。

註および引用文献

- 1) 昭和44年の中学校学習指導要領のみ、我が国の伝統音楽に関する歌唱共通教材と鑑賞共通教材の内容が、他の年代の学習指導要領とは大きく異なり、質・量ともに充実している。具体的には、日本の音楽について、歌唱共通教材に日本の民謡を加えるとともに、鑑賞共通教材で箏曲、三曲合奏、長唄、雅楽、尺八曲、義太夫節を入れ替えて、これらの指導の観点を明示し、日本の音楽の特質がとらえやすいようにしている。音楽学者の吉川は、歌詞や曲調の問題を検討し、全般に古典に直結させることを考えて、それ以前の教材曲を大幅に取り替えたことを述べている。吉川英史「日本音楽の鑑賞について」『日本の伝統音楽』音楽之友社、1970、pp.194-202。
- 2) マインドマップの特徴は、①中心イメージを描くことにより、関心の対象を明確にすること、②中心イメージから主要テーマを枝（ブランチ）のように放射状に広げること、③ブランチには関連する重要なイメージや重要な言葉をつなげること、④あまり重要でないイメージや言葉も、より重要なものに付随する形で加えること、である。トニー・ブザン／バリー・ブザン（神田昌典訳）『ザ・マインドマップ』ダイヤモンド社、2005。
- 3) 茂手木潔子・秦野育子「小学校における『チンドン』を題材とした日本音楽の学習」『上越教育大学研究紀要』第24巻、第2号、2005、pp.495-514。
- 4) 福永喜史「ベトナムの伝統音楽の楽器を使った鑑賞と体験学習—ベトナムの楽器ツールン—」『岡山大学教育実践総合センター紀要』第7巻、2007、pp.83-92。
- 5) 高橋澄代「日本伝統音楽指導の体系化に関する研究—《雅楽「越天楽」》を教材として—」『日本学校音楽教育実践学会紀要』Vol.13、2009、pp.183-184。
- 6) 諸来とは左右のばちを交互に細かく刻む打ち方のことであり、片来とは左のばちでゆっくりから次第に細かく刻む打ち方のことである。
- 7) 齊藤淳子「和太鼓を中心とした郷土の伝統音楽を素材とした創作活動に関する実践的研究—中学生を対象として—」『日本学校音楽教育実践学会紀要』Vol.12、2008、pp.100-101。
- 8) 石井一二三「小学校6学年学習指導案／はく・私だけの雅楽を作ろう」（青森県三戸町立斗川小学校）CUBE LAND Web サイトより（http://www.cubeland.net/jirei_hm/00587/〔2011.6.1 採取〕）
- 9) 大西潤一「高等学校における情報科教育と音楽の融合—コンピュータ音楽の実践を通して—」『音楽文化教育学研究紀要』XXII・XXIII、2011、pp.9-18。
- 10) 音楽学者の岡田は、音楽を生み出した共同体／歴史／文化が遠く彼方に過ぎ去っていくにつれ、「意味の解釈」も困難になっていくことを述べている。岡田暁生『音楽の聴き方』中央公論社、2009。